

第3室

(1) 15:30 ~ 16:00 (2) 16:10 ~ 16:40
(3) 16:50 ~ 17:20 (4) 17:30 ~ 18:00

第3室 (1)

中学2年生の学習定着と運用力促進をめざしたスパイラル・ラーニング学習法による英語指導計画—海外の生徒との交流に向けて

高畑 伸子 (公立諏訪東京理科大学)

この実践研究の目的は、スパイラル・ラーニングの教授法が学習者の長期記憶や運用力に与える影響を調査することである。中学2年生を対象に、スパイラル・ラーニング法を基礎として通年の学習計画をたてた。学習語彙、文法項目を繰り返し、さまざまなアクティブ・ラーニングを実施することで学習者の短期記憶が長期記憶へ移行し、さらに最終的に海外の生徒たちとの交流をすることで英語の運用力が高まることを期待した。データは、教員の観察メモ、学習者の成果物、記録、テスト、アンケート、ループリックから収集し、分析を行った。データ分析の結果、スパイラル・ラーニング教授法が長期にわたる活動を通して、生徒の記憶や成績に良い影響を及ぼしていることが明らかになった。また、パフォーマンス向上につながり、学習者の認知能力（注意力、意欲）を高めることも分かった。

第3室 (2)

SNS X

日本国内で開催される短期集中型イマージョンプログラムによる英語教育の効果

笠井 千勢 (岐阜大学)・阿久津 元 (鶯谷中学高等学校)・神原 利宗 (広島大学)

本研究は、英語母語話者による短期集中型イマージョン教育の効果を検証することを目的とする。イマージョン教育とは、学びたい「言語環境に身を浸す」ことでその言語を習得させる教育方法である。また、外国語を教科として学ぶのではなく、グループワークやタスク問題に従事する際の手段として使用することで自然と言語を習得することも提唱されている。

コロナ禍により海外研修が実現できない昨今、日本国内で実施できる代替となる語学プログラムに注目が集まっている。本研究では、国内に在住する外国人教員（英語母語話者1名・非英語母語話者4名）による5日間（30時間）のイマージョン教育を受講した高校生18人の英語運用能力・モチベーション・認知変化に焦点を当て調査を行なった。

イマージョン教育の最大のメリットは、「英語で考え、英語で話す力」を育成する点である。これまでは海外研修等を通じて育成することができたが、それがままならない今、日本国内で1日6時間、集中的に英語に身を浸す経験がどのような効果を与えるか検証する。

第3室 (3)

ICT を活用した小学校英語教育における自律学習支援の在り方

柴田 里実 (常葉大学)

本研究では、ICT を積極的に活用した1年間の外国語の授業実践を振り返り、その活動を自律学習という視点で分類し、小学校英語教育における自律学習支援の在り方を考察する。第二言語習得理論に基づいて英語学習を考えると、インプット量を増やすこととアウトプットの機会を増やすということが必要不可欠であることに異論を唱えるものはいないだろう。学校教育で学習者が英語を学んでいる場合、授業内のインプットのみ、あるいはアウトプットのみでは、十分な量を確保できているとは言えない。言語学習を導くためには、インプットとアウトプットの量を増やし、自律学習者を育成していくことは、学習者の年齢に関わらず非常に重要である。しかし、日本の小学校英語教育では、授業外での学習を促すためには様々な障害がある。特に、学級内の学習者の英語レベルに格差がある場合、小学生が自分一人で進めることができる英語学習課題を出すことが困難な場合がある。そこで、ICTを活用することで、レベル差をハンドリングし、授業外の学習機会を増やすことができるのではないかと考えた。本研究の研究対象は、ICTを積極的に活用して外国語の授業を実践してきた現職小学校教員1名とし、まず2021年度の授業実践に対しインタビューを行った。次に、研究対象者に授業実践時の気づき等を記録した授業ノートを参照しながら、1年間の授業実践を振り返り、ICTを活用した外国語での授業実践を書き出してもらった。さらに、そのリストをもとに追加インタビューを実施した。最後に収集したデータをもとに、ICTを活用した外国語の授業での活動項目を、自律学習の視点で、授業者と筆者で分類することを試みた。その結果、ICTを活用することで、小学校での外国語で、授業外学習を促進することが可能である可能性が示唆された。

第3室 (4)

SNS X

小学校での外国語による他教科指導の効果と課題—情意要因を中心に

安達 理恵 (椋山女学園大学)

CLIL (内容言語統合型学習) など、小学校で他教科を外国語で学ぶ授業が少しずつ増えている。今回は中部地方の一公立小学校でバイリンガル教育を導入した小学校3年生から6年生を対象に効果と課題を検討する。当該小学校では、ALTの先生と担任教員がペアで英語の授業だけでなく複数の科目でも外国語を使って実践してきた。2019年と2020年の2回、外国語に対する児童の外国語学習意欲や授業や将来の外国語使用に対する意識を中心に、どのような影響が見られるか全20問の質問紙で検討した。いずれの年度でも、小学校3年生から6年生の全児童(各約120名)を対象に調査したところ、いずれの結果も、英語に対する目的意識(将来国際的に活躍する仕事をするために大切など)に関する項目は高い結果となった。また、いずれの年度の児童も外国への滞在経験は少ないものの(全くない~旅行程度)、比較的、英語に対して肯定的な態度を示し(もっとわかるようになりたいなど)、英語学習に対する情意要因には良い影響を及ぼしていると考えられた。その一方、どの項目も少人数であるが、否定的にとらえている児童もいた。特に英

語以外の授業で英語を使って授業することや、中学校での英語の時間に対して否定的な感情を持つ児童もいた。今後の課題として、児童の学習に対する態度がより肯定的になるにはどのような支援が必要になるかを中心に述べる。